

損なわないで照射線量を低減する、あるいは、副作用を軽減するための治療計画の見直しなど)に取り組んでおられる方もおられます。そのような活躍を支援できるような旗印を学会活動の一つとして掲げられるよう、早急に理事会でも検討していきたいと思えます。

もちろん、今まで取り組んできた放射線看護に関する教育の推進、放射線診療に関わる看護師の放射線管理と被ばく管理の改善、また、原子力災害に関わる NuHAT (Nuclear disaster Health Assistance Team: 原子力災害支援保健チーム)の構築などに対する学会としての取り組みも続きます。このようにこれからの学会活動を考えると、果たしてどこまで実現できるだろうかと不安もよぎりますが、会員の皆様のご理解とお力添えをいただきながら、全力で取り組んでいきたいと考えております。

どうぞ今後ともよろしくご支援のほどお願い申し上げます。

2. トピックス

【第49回フローレンス・ナイチンゲール記章 (FNM) を受賞して】

前理事長、監事
草間朋子

この度、身に余る栄誉ある FNM をいただくことができました。受賞の理由として、「放射線看護」と、「診療看護師 (NP) の養成教育」に関する活動に着目していただきました。災害や紛争時の看護活動や公衆衛生、看護教育などに多大な貢献があった看護師に与えられる FNM を、浅学な私がいただくことができましたのは、「日本放射線看護学会」の強力なご支援、ご協力があったからであり、私個人というよりは、「日本放射線看護学会」の活動が

評価されたものと嬉しく思っております。メダルの裏側には「博愛の功績を顕彰しこれを永遠に世界に伝える」と記されております。受賞を機会に、学会の皆さまと、「放射線看護」を発展・進化させ、広島・長崎の原爆被爆、福島事故を経験した日本だからこそ、世界に向けて「放射線看護」に関する情報発信をしていく責任があると思っております。

「放射線看護」は、国際的にもまだ確立した領域にはなっていないと思えます。医療領域やエネルギー領域において放射線・原子力利用が、日常的になっているにもかかわらず、看護職の「放射線」「原子力」等に対する関心は低く、知識も不十分であり、さらに、放射線・原子力関係者、専門家の間でも、放射線・原子力と看護師との関わり必要性を認識している人はほとんどいないのが現状だと思えます。放射線・原子力利用において人々の関心の高い課題は放射線の健康影響です。患者さんや地域住民の方々にとって、最も身近な存在である看護職は、「放射線リスク」に対する科学的知見(「安全」)を、人々の心に落とし込み放射線利用に対する「納得」「安心」を得ていく架け橋になると信じております。このための具体的な方策を検討し、実行していくことが放射線看護学会のミッションの一つであると思っております。



かつて、原子力防災に関する国の専門委員会の席で、原子力防災における看護職の存在の重要性に鑑み「看護職の代表を委員に加えて欲しい」旨の発言をしたときに、座長（医師）の「医師がいるから必要ない」とのけんもほろろの回答があったことを思い出しています。放射線・原子力に限らず、医療職の半数以上を占める看護職を「蚊帳の外」においた議論は少なくなってきたことを期待したいですが、患者さんや住民の視点を重視した社会に変えていくためには、住民等のアドボケートの役割を持つ看護職が声を出していく必要があると思っております。「できていないこと」を「できるようにしていく」ことが、新たな発展につながると思います。FNMの受賞をきっかけに、看護においてはマイナーな領域である「放射線看護」に対する看護職や放射線医療や原子力関係者の関心が高まることを期待しております。「気力」と「体力」が続く限り、みなさんと一緒に私も頑張ります。



3. 各委員会からのお知らせ

1) 学術推進委員会

《委員会概要》

学術推進委員会は一般社団法人日本放射線看護学会の学術推進を目的とした活動を行っています。具体的には関連学会及び団体との連携強化に関する活動、ならびに学会および学術集会の活性化・学術推進活動を行っています。

《委員》

委員長：野戸結花

委員：太田勝正、佐藤美佳、小山内暢、堀田昇吾

《活動内容》

2023年度は下記の活動を行っています。

(1) 学会および学術集会の活性化・学術推進活動

第12回学術集会において交流集会を開催しました。詳細は次回のニュースレターで報告をします。

交流集会Ⅳ：放射線看護モデルシラバスの活用に向けてーモデル授業 その4 放射線の医療利用と放射線防護・放射線防護における看護職の役割ー

日時：9月10日（日）9：00～10：00

概要：2019年に公開した放射線看護モデルシラバス（1単位版、2コマ版）の活用を促進する目的で、昨年に引き続き、モデル授業として「放射線の医療利用と放射線防護・放射線防護における看護職の役割」をご紹介しました。参加された方々とのディスカッションを通し、効果的な放射線看護教育について共有することができました。

(2) 「看護職のための眼の水晶体の放射線防護ガイドライン」普及のための広報活動

昨年度に引き続いて、400～499床の病院301施設に広報用チラシを郵送しました。また、第

12 回学術集会で本ガイドライン導入に関する相談会を実施しました。

(3)放射線看護専門看護師の活動支援

放射線看護高度看護実践者を教育する教育課程（大学院）の修了生のネットワークとして、放射線看護キャリア開発グループを設立し、その活動を支援しています。定期的にオンライン会議を開催し、積極的な情報交換を行っています。

2) 編集委員会

《委員会概要》

編集委員会は、学会誌の編集と発行を行い、主に学会員皆様の論文投稿から論文掲載までの期間に関わります。また、この一連の作業が円滑に進むように編集システムの環境を整えています。

《委員》

委員長：吉田浩二

副委員長：松成裕子

委員：大石景子、北宮千秋、佐藤美佳、
沼口香織、堀裕子、三森寧子

《活動内容》

- 学術誌を年に2回(6月末と12月末)発刊しています(web公表)。
- 現在では、随時投稿から随時掲載までの流れが定着し、約6ヵ月でJ-stageに早期公開されます。
- 掲載された論文の中から、年に1回、優秀論文賞を選出しています(2022年度:該当論文なし)。
- 学術集会において、編集委員会企画(優秀論文賞受賞者の表彰式と講演会)を開催しています。なお、第12回学術集会(in長崎)では、2022年度の優秀論文賞が該当なしであったため、開催はございません。
- 学会員の論文投稿の支援を行っています。

編集委員会は、皆様の研究成果や情報、放射線看護の実践を一早く発信し、社会に貢献できる学会誌を目指していきます。引き続き、どうぞよろしくご協力致します。

3) 広報・渉外委員会

《委員会概要》

広報・渉外委員会は、日本放射線看護学会の活動を会員の皆様や社会にお知らせし、関連する様々な学術団体等と連携・協働をはかる活動を行っております。

《委員》

委員長：作田裕美

副委員長：堀田昇吾

委員：大串晃弘、浅田裕美

《活動報告》

2023年度は下記の活動を行っております。

(1) 広報誌(ニュースレター)の発行(年2回発行)

9月の本号と2024年3月の号の2刊発行する予定です。

(2) 学会ホームページの管理・更新

日本語版ならびに英語版のHP管理・更新を行っております。HPを活用し、学会内外からの情報をタイムリーに発信するよう努めております。

(3) 日本放射線技術学会との協定にそった学術協力の推進

①学術集会企画

第12回学術集会において、日本放射線技術学会との共同企画を開催いたしました。

日時：9月10日(日)11:00~12:00

テーマ：放射線防護・安全教育を効果的・効率的に推進する上で、影響するであろう事は何だろうか？

登壇者：

【公益社団法人日本放射線技術学会】

五十嵐隆元先生 国際医療福祉大学成田病院
「医療現場での放射線防護・安全教育における課題」

宮島隆一先生 国立病院機構鹿児島医療センター
「被ばく管理を行っている診療放射線技師の立場から」

【一般社団法人日本放射線看護学会】

兵藤悦子先生 独立行政法人国立病院機構相模原病院
「放射線診療や治療に関わる看護師教育の構築」

増島ゆかり先生 日本医科大学武蔵小杉病院
「看護師への放射線防護・安全教育の現状と推進に向けて」

座長：濱田圭介先生 国立病院機構九州がんセンター（日本放射線技術学会）
堀田昇吾先生 東京医療保健大学（日本放射線看護学会）

②共同研究

本学会と日本放射線技術学会の会員に貢献する共同研究を進めています。

4) 国際交流委員会

《委員会概要》

本委員会は2015年に発足し、放射線看護学に関する国内外の動向の把握と学会員への情報提供、国内外の関連学術団体との連絡・協力、本学会活動への国際的な情報発信の支援等の活動を行っています。

《委員》

委員長：山口拓允

副委員長：後藤あや

委員：杉浦紳之、生田優子

《これまでの活動内容と今後》

本委員会は発足当初から、前国際交流委員長、小西恵美子先生の下、積極的な国際交流活動を推進してきました。今期からは山口拓允が新たに委員長を務め、放射線看護学会の国際交流や関連学会との連携を継続していきます。また、今期新たに株式会社千代田テクノルの杉浦紳之先生を委員として迎え、国際交流分野における関連学会とのさらなる連携推進に努めたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

今年度の活動は、これまでの活動に加え、2023年11月に東京で開催されるICRP（国際放射線防護委員会）年次大会への応募演題の支援等を、引き続き小西前委員長と共同で進めていき、シームレスな対応ができるようにしたいと考えております。また、英語で発表される同学会での発表内容を同年次大会後、他委員会とも連携を取りながら日本語で広く共有したいと考えております。

これまでの主な活動内容としては、学術集会テーマの英訳や国際学会等への参加があります。今後もこれらの活動を継続した上で、放射線看護学会会員の皆さん向けの放射線看護学に関する国際誌の紹介など、学会員の研究活動をサポートする方向でも取り組みを広げたいと考えております。特に、修士・博士課程の学生や専門看護師養成課程に参加する方々にとって、有用なリソースを提供できるよう尽力します。本活動に関しては特に本委員会外からのご協力も極めて重要となりますので、ご協力賜れますと幸いです。

4. 学術集会

1) 第12回学術集会の報告

日本放射線看護学会第12回学術集会 会長
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻
准教授 吉田浩二

第12回学術集会は、2023年9月9日(土)、
10日(日)に長崎大学医学部記念講堂・良順会
館・ポンペ会館(長崎市坂本1-12-4)で開催
いたしました。



本学術集会のテーマは「放射線看護の継承と創造～放射線看護専門看護師と描く未来～」とし、会長講演、プロローグ、基調講演、特別講演、シンポジウム、関連学会共同企画、環境省セミナー、ランチョンセミナー、一般演題発表、交流集会、ワークショップと様々な企画を準備しました。4年ぶりの対面開催、地方での開催となりましたが、多くの方に参加いただき、盛会のうちに終えることが出来ました。ご参加の皆様、また学術集会の準備・運営にご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

今回のテーマには、「継承」と「創造」が入っています。これは、これまでの先人たちの経験から看護の土台が築かれてきたように、放射線看護分野でも、これまでの経験が現在へと繋がっています。我々は、これまでの放射線看護の知や経験の歴史を「継承」し、これからの未来につながるように、さらに「創造」していくと

いう思いを込めました。そして、テーマには、「放射線看護専門看護師」が入っています。弘前大学、鹿児島大学、長崎大学では放射線看護分野の専門看護師誕生を目指し、様々な努力を積み重ねてきた結果が実り、2022年12月に3名の放射線看護専門看護師が誕生しました。放射線看護専門看護師は、放射線診療の場や地域での放射線利用の場での活躍が期待されていますが、まだまだ病院や地域からの認知度が低いのが現状です。まずは誕生のPR、そして、これまでの経験とこれから歴史を積み重ね、放射線看護専門看護師とともに看護職の皆様と一緒に創造できる未来を考えることができるようにとの願いを込めました。

このようなテーマの中で、長崎大学原爆後障害研究所所長の中島正洋先生、長崎大学医学部保健学科長の澤井照光先生から祝辞をいただき、会長講演にはじまり、プロローグでは平和証言者の山野湧水様から「長崎原爆 池田道明さんの被爆体験」をテーマに、被爆体験をご紹介いただき、平和の尊さや経験を継承する意義を考える機会となりました。基調講演では、本学会理事長の太田勝正先生から「日本放射線看護学会の歩みと放射線看護専門看護師への期待」をテーマに、日本放射線看護学会のこれまでとこれからをご講演いただきました。また、特別講演では、長崎大学原爆後障害研究所の高村昇先生から「長崎-チヨルノーベリ-福島からの教訓」をテーマに、長崎大学の放射線科学分野での歩みを、環境省セミナーでは福島県立医科大学の坪倉正治先生から「東京電力福島第一原子力発電所事故後の健康影響について」をテーマに、福島第一原子力発電所事故後の放射線被ばくの健康影響や福島での様々な取り組みをご講演いただきました。



次に、本学術集会では、3つのシンポジウムを企画しました。



専門看護師シンポジウムでは、テーマを「放射線看護専門看護師が描く未来」として、漆坂真弓先生には、放射線看護専門看護師の育成の立場から、そして、2022年に誕生した放射線看護専門看護師の増島ゆかり先生、守屋靖代先生、大石景子先生の3名からは、実践事例を踏まえながら現在の取り組みとこれからの専門看護師としての展望をご講演いただきました。放射線治療シンポジウムでは、テーマを「頭頸部放射線治療における放射線性皮膚炎ケアへの多職種連携の取り組み」として、医師、診療放射線技師、皮膚・排泄ケア認定看護師、がん放射線療法看護認定看護師の立場から、長崎大学病院における多職種連携の実際のお話をご講演いただきました。そして、原子力災害医療シンポジウムでは、テーマを「原子力災害医療の過

去と現在」として、福島第一原子力発電所事故直後から現在までの対応について、原発の廃炉や次の事故に備えた原子力災害医療体制、福島県医科大学と長崎大学での各機関での取り組みについてご講演いただきました。

その他、本学会と日本放射線技術学会の共同企画ではテーマを「放射線防護・安全教育を効果的・効率的に推進する上で、影響するであろう事は何だろうか?」としたシンポジウム、会員の皆様からは一般演題24演題と交流集会5演題の応募があり、示唆に富む内容で新しい交流がうまれました。また、長崎大学の各施設の協力を得て、放射線総合センターの横山須美先生からは「IRC-game (リスクコミュニケーション・トレーニングゲーム) 体験会」、原子力災害対策戦略本部の皆様からは「防護服着脱体験会」のワークショップを実施していただきました。このように多くのプログラムにご協力いただきました講師、座長、参加者の皆様に感謝申し上げます。

また、本学術集会では、本学会の前理事長である草間朋子先生が第49回フローレンス・ナイチンゲール記章を受章されたことを記念し、受賞祝賀式を開催しました。長崎県看護協会・看護連盟の名誉会長である山口ミユキ先生からの力強いご祝辞と、草間朋子先生からの本学会への期待のお言葉を頂戴し、本学会の果たす役割を改めて考える機会となりました。



さて、本学会の学術集会は、第8回(2019年の福島)を最後にCOVID19の影響で、対面開催を行っていませんでしたが、今回4年ぶりの開催となり、会場内で参加者同士の交流が多くみられたことは大変嬉しく思います。今後は、今回の交流を深めることはもとより、ご発表いただいた研究成果や実践活動をはじめ、自施設で取り組んでいる内容を、ぜひ日本放射線看護学会誌に投稿していただき、放射線看護の継承と創造の1ページに貢献していただけたらと思っております。

次期学術集会は鹿児島県での開催が決まっておりますので、また皆様との再会を信じ、そして、ロシアのウクライナ侵攻が終結し、平和が訪れることを信じ、本学術集会報告を締めさせていただきます。この度のご参加、ご支援誠にありがとうございました。

末筆ながら、皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

2) 第13回学術集会のご案内

日本放射線看護学会第13回学術集会会長
鹿児島大学医学部保健学科
兼任地域防災教育研究センター
教授 松成 裕子

第13回学術集会を2024年9月14日(土)、15日(日)に下記の通り開催いたします。本学術集会のテーマは「**放射線看護の黎明と創設期から発展と進化に挑む**」としました。放射線診療が進歩を遂げる中で、放射線看護も新たな段階に入ったことを実感しています。さらなる発展に挑むこの学術集会では、放射線診療に係わる関連職種との連携を深め、放射線被ばくへの不安や人体影響に対して、高度な看護ケアの実践に焦点を当てます。こうした取り組

みによって、対象者と看護職者自身の安全・安心を保証し、QOLの向上を目指します。

第12回の長崎の地から、鹿児島へ移し、ひとつの経験を積み、放射線看護学のさらなる進化と発展を深めるために、実り多き議論と看護の探求ができるように準備していきます。これまで重ねられた英知とみなさまの経験を共有することで、新たな放射線看護の探求が行える場となりますように、多くのご参加をお待ちしております。

《学術集会の概要》

1. 会期 2024年9月14日(土)、15日(日)
2. 会場 鹿児島大学稲盛会館キミ&ケサメモリアルホール
(〒890-0022 鹿児島県鹿児島市郡元 3丁目 3-20)
3. 学術集会のテーマ 放射線看護の黎明と創設期から発展と進化に挑む
4. 演題募集期間 2024年4月8日(月)~6月28日(金)
5. プログラム

【会長講演】 「放射線看護の黎明と創設期から発展と進化に挑む」

【プロローグ】 「放射線看護の黎明と創設期」

【特別記念講演】 演者

【基調講演】 「がん看護CNSとして役割の遂行、拡大を図った経験から放射線看護専門看護師への期待」 演者 三浦浅子氏

【シンポジウム】

テーマ：『他職種から放射線看護専門看護師に期待すること』

「放射線治療装置ETHOSの活用とCNS」
演者 医師 未定

「陽子線治療とCNS」演者 医師 未定

「IVRカテーテルアブレーション治療におけるCNS」演者 医師 未定

「原子力災害における CNS」 演者 診療
放射線技師 未定

【シンポジウム】

テーマ：『放射線看護のスペシャリスト・
ゼネラリストの連携と協働』

がん放射線療法認定看護師 演者未定

インターベンションエキスパートナース

演者未定

がん専門看護師 演者未定

放射線看護専門看護師 演者未定

【鼎談】

テーマ：「放射線看護学の未来」 演者未定

【学会企画】日本放射線看護学会・日本放
射線技術学会共同企画

【交流集会】【演題発表（口演・示説）】

【ワークショップ】【市民公開講座】

5. 寄稿

放射線診療における放射線防護・安全と看護 職に期待される役割

作田裕美

広報渉外委員会 委員長

大阪公立大学大学院看護学研究科 教授

2021年度に、一般社団法人日本放射線看護学会と公益社団法人日本放射線技術学会が共同して、放射線業務従事者に対する放射線防護・安全教育に係る実態調査を行った。寄せられた自由回答記述の分析から、残念ながら放射線防護・安全教育に向かう看護職の受け身姿勢が抽出された。看護職は、チーム医療のなかで、どの専門職よりも患者・家族の最も近い場所において、正しい知識と技術をもって対象の健康問題をアセスメントし、患者固有のニーズを掬い上げ必要なケアに繋げている。多くの診療分野において看護の側面から

リーダーシップを発揮しているが、こと放射線診療の場面では引いてしまうのである。この背景には、多くの先行研究で明らかのように、看護学基礎教育及び現任教育における放射線に関する教育の不足があることは否めない。また、看護人材を病棟に厚く配置し、職務ローテーションによって幅広い診療科の看護を経験させる看護サービス提供システムの特徴も挙げられよう。外来に位置付けられることの多い放射線診療科に配置転換になった場合、経験の連続性が中断され病棟看護経験で培った看護の面白さを見失うことにならないとも限らない。しかしながら、放射線診断・治療は今後ますます重要性を増す不可欠な医療分野である。放射線に直接かかわるのではない看護職に期待される役割は、放射線防護・安全活動によって、患者・家族・医療者を守り、効果的な放射線診療を支えることである。

科学技術の進歩に伴い飛躍的に発展した現代医学は必然的に医療行為の専門分化を生み、その分化に伴って多くの保健医療専門職を輩出してきた。これらの内、最も早く専門職としての身分法が制定されたのは、医師法、歯科医師法と並ぶ保健師助産師看護師法であった（昭和23年）。第5条において「看護師」とは、厚生労働大臣の免許を受けて、傷病者若しくはじよく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行うことを業とする者をいうと定義されている。進展する放射線診療における看護実践は、身分法に則って避けては通れないのである。「経験がない、知識が乏しい、だから避けて通りたい」の苦手意識を脱ぎ捨て、正しく知ることが、役割期待に応える第一歩であると考えている。

【改訂版「医療領域の放射線管理マニュアルQ&A・医療関係法令一」（第7版改訂、2023年10月、医療放射線防護連絡協議会）のコラムより】